

電話会議開催日：2021年5月10日

2021年3月期（2020年度） 連結決算電話会議 質疑応答

【質問者1】

- Q：補足説明資料1ページ目の下段で海外銅鉱山の税金費用増▲166億円とある。こうした要因はこれまで出していなかったと思うが、これはロイヤリティが上がった影響か。
- A：従来この部分では出てこなかった税金の要因が大きく出ているが、ここの分析では持分法に含まれているシエラゴルダ・セロベルデ・カンデラリアについても銅価格・コスト差・数量差等に分解して説明している。銅の+511億円という価格・条件差のうち持分法の貢献が300億円くらい入っており、その大きな利益好転に対して税金費用が発生することになる。この分析手法自体は従来から変更していない。
- Q：補足説明資料5ページ目の上段の材料事業の説明について、売上総利益は年度の見通しで増益となっているが、セグメント利益では横ばいとなるのはどういう背景か。
- A：売上総利益は増収に伴う好転として出ているが、持分法損益の部分で、材料の持分法適用会社が21年度は悪化する見込みとなっている。「エヌ・イー ケムキャット・日本ケッチェン・MSジンク・その他」の欄では21年度の予想は+14億円好転に見えているが、実際は材料セグメントのエヌ・イーケムキャット・日本ケッチェンでは悪化している。もう一つは内部管理上、21年度予想から本社費用の配賦の適用の仕方を変えている。トータルでは同じだが、各セグメントの事業損益が悪化し、調整額の部分が好転するということが影響している。また20年度はコロナの影響もあり販売管理費が少なかったが、21年度予想では通常どおりで計上していることによる悪化も入っている。これらの要因による影響が売上総利益より下で出ている。
- Q：補足説明資料5ページ目の下、製錬の「その他」の増減がとても大きい。為替以外の部分で大きく増減する背景について解説いただきたい。
- A：銅系のその他のマイナスには為替の影響はあまりないが、他の要因としてはパラジウムなどがマイナスの影響としてある。
- Q：補足説明資料6ページ目の持分法損益でシエラゴルダがかなり大きく好転を見ているが、コメントいただきたい。
- A：21年度は、生産は180千トン、販売は177千トンということで大幅な増産・増販を計画している。デボトルネッキングは20年度で完成し、概ね2割処理量増の体制を確立しており、この効果を21年度は年間フルに享受できる見込み。加えて、品位の向上、銅価格の上昇が増益の理由。
- Q：ペルーの大統領選挙で、選挙結果によってはセロベルデを国有化するというような話もある。何か知見があったら教えてほしい。
- A：今のところ、どちらが当選しても何らかの影響があると考えてはいる。今後の具体的な方針・政策を注視していく。
- Q：シエラゴルダで利益が出てきているが、感応度は昨年と変わっていない。元々入っていたため影響しないということか。
- A：元々シエラゴルダも含まれたベースで出している。

【質問者 2】

Q：補足説明資料 1 ページ目の対 20 年度 2 月予想との比較で、銅の価格条件差で▲14 億円となっているが、銅価格は上振れている。どのような要因によるものか。

A：価格は上昇しているが、それ以外のプレミアムの部分などのマイナス影響を含んでいる。

Q：補足説明資料 5 ページ目の製錬の今年の増減益で銅の価格・条件差がプラスとなっている。マイナスになるというイメージだがどのような要因か。

A：銅系のその他の副産品影響と販売条件が含まれている。通常の TC/RC は厳しい方向に行っているが、それ以外の部分による好転。

Q：パラジウムは「その他」に入っていると思うが、それ以外の条件差が入っているということか。

A：ご認識のとおり。

Q：補足説明資料 1 ページで、未実現利益について、対 2 月予想比較で+82 億円となっているが、どのような要因でプラスになったのか。

A：未実現利益等は同ページのそれぞれのところを出ているが、未実現利益の他に、「相場要因・材料」などで抜き出している部分以外の持分法会社の損益の増減、パラジウムの影響などが含まれている。

Q：補足説明資料 5 ページ、セグメント利益の調整額が 20 年度・21 年度で大きく変動するが、どのような要因で変動するのか。

A：前述の本社費用配賦方法変更の影響が調整額+92 億円の中に少なからず含まれている。

【質問者 3】

Q：材料事業について、20 年度第 4 四半期のセグメント利益は 51 億円とかなり高水準だったが、21 年度は 110 億円にとどまるのはどのような背景か。

A：持分法損益の悪化、具体的にはエヌ・イー ケムキャットで 20 年度第 4 四半期に益要因が出ていたが、財務影響によるものであり 21 年度は無くなるという出入りが一つの要因。もう一つは前述のとおり、販売管理費要因、本社費用配賦変更による影響があるが、第 4 四半期に限るとエヌ・イー ケムキャットの影響が大きいということになる。

Q：電池の受払差のプラス影響は 20 年度第 4 四半期に入っていないか。

A：19 年度は悪化が入っているが、20 年度はほぼトントン。このため、19 年度・20 年度で見ると増益に見える。

Q：エヌ・イー ケムキャットは貴金属価格が上がった一過性の要因があったということか。

A：そうなる。

Q：シエラゴールドの鉱石の品位について、今年度か来年度が一番よく、それ以降は悪くなるという理解で合っているか。

A：シエラゴールドの品位については、18 中計の公表の際にはシエラゴールドの 21 年の生産量を 200 千トン、品位は 21 年がピークと見ていた。21 年の生産量は直近の試錐等に基づく計画では 180 千トン

となっており、給鉱品位が21年は18中計より落ちているが、その分22年以降上昇とみており、時期がずれたということになっている。

Q：モレンシーのリーチング操業について、今期減産影響が出てくるのはこの先継続するのか。

A：19年、20年とリーチングによるカソード生産の非常に好調なトレンドが続いており、年度当初の計画と比べて大きく上振れるという傾向だったが、その傾向が落ち着いてきている。これに加え、コロナ影響下での最適な操業度でコスト削減や投資抑制をした状態での操業を継続しており、21年の操業度としては概ね20年第4四半期並みの操業が続くことを見込んでいる。

以上